

コメント、討論

コメント1 橋川武郎（東京大学社会科学研究所）

1980年代90年代は歴史的な大変動があったと言われました。歴史家も現在を気にしなければいけないほどの大変動であったということだが、それは歴史的脈絡のなかでどのように位置づけるのか。これが、お伺いしたい1点目です。

2点目として伺いたいのは、『アメリカ型経済社会の二面性』の最初に出てくるマーク・ロー氏の論文をみると、要するにアングロサクソンのコーポレートガバナンスは社民的でない社会でしか効かないのだという話が書かれている。しかし、それではアメリカはモデルにならないではないか、と思われる。ところがロー論文の途中で、製造業からサービス産業に産業構造がかわってくると、社民的な枠組みというもの意味がなくなる、ということも書かれている。また福田論文では、サービス産業の構造とITの構造が密接にかかわっていることを示している。するとアメリカがモデルになる根拠は、IT革命をバックにした世界的な「経済のサービス化」のようなものでアメリカが発信地になるからである、と理解できるが、この解釈でいいか。

3点目として、アメリカについてこの本は「経済社会の二面性」という言葉を使っているが、「二面性」というのはどういうことか。単純な市場論理ではなく、カウンターベーリングパワーがあるという意味で二面性というのか。井村「アメリカの金融再編と金融秩序」、あるいは荒巻「1997-99年国際金融危機」を読むと、そのように感じる。ただし、市場化に対して社会的枠組みがチェックするという意味では、世界中同じような枠組みになっているはずだ。

にもかかわらず、アメリカがモデルになっているのは、市場の論理とそれをチェックするカウンターベーリングパワーの組み合わせ方のところで、たぶんアメリカは市場に近いところに均衡点があり、そのありかたが新しいからではないかと思われる。「二面性」という指摘よりも、市場化と拮抗力の両者のかかわり方で、アメリカにどのような特質があるのか示していただきたい。

4点目はその上で日本の位置なのだが、ロー氏の言葉を借りれば、日本は社民型の亜流ということだが・・・、本書後ろのほうで花崎氏の出されている統計表を見ると、貿易収支は日本はいまだに良好である。日本が国際基準からして、明らかにおかしいと思われる点は、財政赤字が急激に増えていることである。一方で、対外債務が増え、これだけ赤字のあるアメリカが世界のモデルになっていく。アメリカからみて90年代の日本の問題点がどこにあるのか、というところをお聞きしたい。

もうひとつ環太平洋という観点において、アメリカがあって、その他の国のワン・オブ・ゼムの日本なのか。環太平洋で考えると、アメリカという要因に対して単なる従属要因なのか、あるいは何らかの独立変数としての意味を日本が持っているのかどうか。アメリカを中心としたシステムにおいて、日本のどこが独立変数たりうるのか伺いたい。

また、我々のプロジェクトで視野に入っていなかった問題にイスラムの問題がある。アメリカ型の豊かさが広がっている状況下において、金融危機の後、アジアの企業の変容に関して、---サプライサイドを変えようとしているが、一方でコンシューマーリズムはほとんど変わっていないという指摘がある。コンシューマーリズムに対する明らかなアンチテーゼという意味でイスラムが位置付けられる、という見方もあるが、この点はどうか。

コメント 2 河合正弘（財務省）

最初の油井報告でのアメリカの問題だが、アメリカは完全にアジア太平洋に向いているわけではない、というようなことを言われた。東海岸と西海岸では経済的な緊密度が違うはずだ。アジアとの関係においてアメリカをひとつに纏めてしまえるのか。

コメント 3 仁田道夫（東京大学社会科学研究所）

「市場対国家」と訳されているダニエル・ヤーギン、ジョセフ・スタニロー共著 *The Commanding Heights* がある。ケインズの敗北、ハイエク、フリードマンの勝利というストーリーになっていて、ある意味非常に明確なメッセージがある本で、それによって 90 年代以後の動きを解釈しようという課題が提示されている。それに対して何か新しい論点として挙げられるものはあるか？

答え 油井

大変動の歴史的な性格をどう捉えるかについては、歴史家はあるシステムの変動に直面すると、世界的な変化ということを経験する傾向はあると思う。戦後世界体制の転換のようなものは 60 年代の末頃から、IMF 体制の崩壊、ドル危機などとして言われていた。また戦後世界体制は崩壊しつつあり、アメリカは衰退する、という議論が 1980 年代には主流であった。ポール・ケネディーのようにアメリカ人自身もアメリカ衰退論を論じていた時期があったと思う。しかし、90 年代になってアメリカ経済が好調であることを目撃してからは、むしろ覇権持続論が強まっていると思われる。しかも冷戦が崩壊して軍事的な一極集中は誰の目にも明らかで、経済的にもアメリカは好調であるということで、アメリカの覇権を再評価する議論が最近強まってきている。20 世紀後半以後の趨勢がむしろ 21 世紀に持ち越され、変動論ではなくなっている面もある。

グローバリゼーションはアメリカを発信地とし、世界への影響力も大きい。しかし市場経済化、民主化というのはアメリカの専売特許ではなく、ヨーロッパも日本も主張するといったように、多元的な競争関係の中で進展してくる。一方、アメリカ国内でも保護主義的な動きはたえず浮上し、グローバリズムの進展は、むしろ国民経済の相対化のような動

きになっている。反グローバリズムの動きはNGOのネットワークとしてグローバルに展開している。セーフティー・ネットを主張するようなグループもグローバルにネットワークを作りつつある。そういう意味ではグローバリズムの台頭、反グローバリズムの台頭という両面からして国民国家というものの拘束力が弱くなってきている。これは大きな変動だといえる。近代から20世紀までの基本的なシステムはネーションステートシステムであったが、21世紀は明らかにそれでは済まなくなった。近代から、脱近代へという変化が見られる。

2つ目はリージョナリズムであるが、第一次世界大戦後の趨勢として地域統合がヨーロッパで始まり、ついでASEANのようなところに来た。これはどちらかというとも最初は例外的な動きとみられたが、今ではNAFTA、APECというように世界中にある種の地域統合が進展しつつあり、21世紀になるとそれはますます強まると考えられる。

リージョナリズムの動向というのも脱近代化、脱国民国家化の特徴で、アイデンティティーは国家単位ではなくて、リージョン単位で再構成されざるを得なくなる状況が出現している。これら2つの面でシステムが転換しつつあるという意味では、大きな転換期として捉えた方がいいのではないか。

質問の中でアメリカといっても多様である、ということがあった。我々もそれを一番注意しているのだが、いま述べたように、反グローバリズム、反リージョナリズムの動きを見ても消費者団体、環境団体など、担い手は多様である。アジア太平洋のことに關しては西海岸が熱心で、地域差は明らかにあると思う。

答え 渋谷

本書はアメリカ研究に関する本であるが、マーク・ローの論文では、ヨーロッパの社会民主主義の話が主としてあって、「それがアメリカにないからだ」という逆転的な話になっている。20世紀的な重化学工業を中心とする産業構造は、その上に労使関係があって、さらに社会民主主義的なシステムがあるが、製造業と、サービス業の力関係が変わっていけば、おのずとその上に乗っている社会システムも変わっていくだろうと思われる。

もう1つ、アメリカ型をモデルとするとき、純粋な市場論理の部分をもってアメリカンモデルといわないで、アメリカ的な社会的枠組みとのかかわりで、どの辺に均衡点があるのか、というところでアメリカンモデルを見出したらどうかというアドバイスをいただいた。この本ではそこまで詰めていないが、実は仮想的に想定していて、我々が日本の構造改革を進める際、アメリカの経営、アメリカの民主主義に対するイメージを持つが、実際はイメージにすぎないもので、もうすこしアメリカを見れば、どこの国でもあるような当たり前の二面性があり、それが相互に補完しあっていることは述べている。

司会

質問のポイントは、アメリカにおける二面性の関連の仕方に独特なものがあるのではないか、ということだったが・・・

答え 渋谷

二面性があるということ指摘しているまでで、確かにどの国にでも二面性はあるが、国際比較までは踏み込んでいない。

質問

「アメリカ型経済社会の二面性」というタイトルの狙いは何か。

アメリカ型経済社会というのは市場論理だけで動いているのではなく、アメリカの歴史的な文脈で作られている社会的なコミュニティとか連帯、制約とかいうものがあるが、市場経済化が進めばそれらが新たに「社会的な規制」として加わってくるのが実態だ、ということなのか？「アメリカ型経済社会」の解釈はこれでよいのか？

渋谷

その通り。「型」をつけるのかつけないか何回か迷った。

意見

さきほど、油井氏が脱近代化のポイントとしてネーション・ステートが終わるということ挙げたが、リプライの時、社会的規制が入る時には、やはり国民国家レベルで入る。国民国家の役割が変わったといえるかもしれないが、単純に無くなっていくのではないという印象をもっている。

意見

国民国家レベルだけでは、非常に限界がでてきているように思う。それをスーパ・ナショナルな EU のような括りでやっている部分と、地方分権でもうすこし基本的な自治体レベルに落としてセイフティー・ネットをはるというふうに、多層化していると思う。社会保険というのは国レベルの問題だが、いろいろなレベルがあるといえる。

司会

最後、イスラムに関する話を伺いたい。

答え 油井

衝撃的な事件で、自分の命のみならず、人の命をまきこんであれだけのテロをやるくらいアメリカは憎まれている。つまり、何でそれだけ憎まれるかという点を分析しないと事件の本質は分からないだろうと思う。テロが起こる背景の分析は重要であろう。そ

ういう意味では、ハンチントンがいうような「文明の衝突」みたいなレベルで宗教の対立という捉えかたをする人はいるけれども、それだけではなく、グローバリズムというものが想像以上に南北格差を生み出しいていて貧困にあえいでいる層からみると、グローバリゼーションの象徴としてのアメリカへの反発があると思う。もちろん背景にはパレスチナの問題、サウジアラビアに米軍が駐留している問題、アフガニスタンの問題といった局地的な問題もあると思う。それを全部つなぐものとして一連の反グローバリズムの流れの一コマとして、ああいったテロが発生したという面も分析しないと、一時的な現象として見過ごしてしまうのではないか。日本ではグローバリゼーションというと、市場化が進み、自由化が進んで人々が豊かになれる、といったような幻想にとらわれがちだが、むしろグローバリゼーションというものが深刻な危機を途上国にもたらしているという面が改めて突きつけられたという印象だ。(2001.10.2)

<記録：飯窪秀樹>